

氏 名	生 井 亮 司
学 位 の 種 類	博 士 (美 術)
学 位 記 番 号	博 美 第 262 号
学位授与年月日	平 成 21 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉少年の詩学－静寂の記憶 〈論文〉触覚の教育学 －塑造制作における「身体的自己」の形成について－
論文等審査委員	
(主査)	東京芸術大学 教 授 (美術学部) 本 郷 寛
(論文第 1 副査)	〃 准教授 (〃) 小 松 佳代子
(作品第 1 副査)	〃 〃 (〃) 木 津 文 哉
(副査)	埼 玉 大 学 教 授 横 尾 哲 生

(論文内容の要旨)

私は主に塑造による彫刻作品の制作を行っている。私にとって制作するということは自己の内的なイメージを素材や対象との接触を通して形象化すること、可触化することである。それは不確かで言葉にすることの困難な感情を身体的行為により物質として客体化することである。

塑造という技法、粘土を用いた造形制作活動は私の表現を行う上で、最も適した素材、技法であると考えている。粘土とは彫刻に用いられる他の素材と比べ、かたちの成型が容易にできるという特長を有する。そのため制作過程における試行錯誤にもっとも適するのである。この制作過程における試行錯誤の可能性が私の制作を支える大きな要因である。私はこのような制作行為を私自身の問題を解決するための思索の手段として位置づけてきた。つまり私の作品は制作行為の中での思索を体现するものである。それゆえ私の制作に内在する問題意識は作者が主体的に「何を作るか」ということではなく、制作過程のなかで「何が作られるか」ということであるといえる。作品制作における制作行為それ自体に私自身の問題意識があるということである。制作行為に内在するものとは「自己」の形成に関わる問題でもある。なぜなら制作行為における試行錯誤とは「自己」についての葛藤や困難を乗り越えるべく行われるものであるからである。それゆえ制作によって「何が作られるか」という問題はそのまま「自己がどのように作られるか」という問題と言い換えてもよいだろう。

本研究は制作者の立場から塑造制作という「身体的行為」によって「自己」が形成されることに制作行為の価値を見出し、人間形成における美術制作の可能性を見出すことを目的とするものである。

第 1 章ではまず、塑造作品の制作技法と素材との関係から、制作過程において作者の意識が変容する可能性について考察した。塑造制作では技法、素材の特長によって作者の身体性が作品に体现されるということを見出した。作者は制作過程において作者自身の内的なイメージと対象とを二重写しにすることによって「対象のリズム」を見出していく。それは作者と対象とのあいだにおいて生起する、対象の「自然さ」というものである。この対象の「自然さ」を作者自身の身体によって捉え、作品に表象することによって作者の意識が変容を促されるということを見出した。さらに粘土そのものが持つ人間への働きかけによって作者は自己の意識を弱めることができる。そのことによって作者の意識が作品に引き寄せられるということを明らかにした。その作品とは自己の身体と外界との関係によって見出した対象そのものである。

第 2 章ではアルベルト・ジャコメッティと柳原義達の制作過程について考察した。ジャコメッティ、

柳原の作品がその制作過程において変容をし続けたのは対象の変化を自身の身体によって感受し、作品として表象するということが続けた結果なのである。つまり彼らは作品を制作するということによって他者と自己とのあいだに生起する自己の身体を発見し続けていたのである。その発見に促されて作品は変化し続けていたということを明らかにした。

第3章では作品の制作過程における「作者」と「作品」を关系的に捉えた。制作過程において「作者」と「作品」の関係における双方からはたらしかけによって作者に新たなかたちが開示される。作者がこの新たなかたちを発見し続けることによって制作過程は循環し続けるということを明らかにした。次にワロンの自我形成論を援用し、自己とは「内なる他者」との関係によって生成するということを提示した。この自己と「内なる他者」の関係は作品制作における「作者」と「作品」の关系到と考えた。この「内なる他者」としての「作品」と自己とのあいだにズレが生じることによって制作行為は循環的に続けられるということを見出した。「内なる他者」としての作品と自己とのズレは、作者自身の身体性と作者の意識のあいだにおこるズレでもある。このズレを重ね合わせようとする動きにおいて自己の意識は弱められ、自己の身体性に引き寄せられていく。このような作用の中で「身体的自己」が形成される可能性を明らかにした。

第4章では塑造制作において作者が作品そのものに直接触れるという行為によって、「身体的自己」が形成されるということを明らかにした。触覚という感覚の二重性によって作者は自己の身体の表象としての「内なる他者」に触れられるということを感じる。つまり自己が自己の身体性に触れられることによって自己性を確かなものとしているのである。この触覚、体性感覚によって作者は「身体的自己」へ形成されていくということを明らかにした。

本論文の成果は塑造制作という美術作品の制作行為によって、作者は「身体的自己」という、自己の身体を基盤とした自己の形成を可能にするということを明らかにした点にある。身体は常に変化し続ける外界と関係、接触していることによって常に自己、作者の意識に先立っている。このような作者の意識に先立つ身体による外界との関係が作品として表象されることで、作者の意識は変容を促され「身体的自己」が生成するのである。制作過程における自己への問いとは世界との関係において生成する「身体的自己」へと意識的な自己を重ね合わせることを意味するのである。

世界と接触することなしに人は「自己性」を確かなものとすることは不可能である。そのためにも身体感受性を最大化し「身体的自己」を獲得するという塑造制作は、世界に生きる自己を形成する可能性のある行為である。すなわち塑造の「制作行為」とは人が世界と出会い直すことを可能にする行為なのである。

塑造作品を制作することによって自己を形成するということは、触覚、体性感覚と中心とした自己の身体によって世界と接触し「身体的自己」を形成することを意味するのである。

(博士論文審査結果の要旨)

提出論文は、塑造制作において作者が素材である粘土や制作途中の作品に直接触れる制作行為を通して、作者の「身体的自己」が形成されていく機制を理論的に考察した論文である。本論文の特徴はなによりも、哲学を中心とした多くの文献を読み込み、自らの制作活動である塑造制作を徹底的に理論化しようとしている点にある。思考を突き詰めていった結果、自分なりの理論枠組みを見出したことは高く評価される。

序章においてまず、今日の社会が感覚を最大限に遮断することで内的な自己がようやく保たれるような危うさを持っていることが指摘され、身体による外界との開かれた接触を取り戻す場として美術制作の可能性を考えたいという問題意識が述べられる。その上で、塑造制作においては粘土の可塑性によって、作者が作品を一方的に作るだけでなく、制作過程の中で作品によって作者が作ることを促されると

いう主客の反転が起こることが論じられる。作者は対象の自然さとでも言うべき「生命一般の根拠」と自らの内的なイメージを重ね合わせることで、自らの制作に確からしさを得ていく。作者の身体によって作られつつある作品は、作者の身体の表象とも言うべきものであり、それゆえ制作行為は作者の身体性に作者の意識を重ね合わせていくことを意味する。作者が作品に触れて制作することは、実は自らの身体に触れることであり、作者と作品の主客の反転は、触れることが同時に触れられることであることに端的に表れる。制作行為とは、触覚を介した「内なる他者」たる作品と作者の意識との間を循環することであり、それゆえに作品の生成と同期して作者の「身体的自己」が形成されるというのが本論文の結論である。

本論文はこのように制作過程において生起している事柄を精緻に理論化していくことに成功している。また、「触覚の教育学」という意欲的なタイトルに表れているように、これまでの教育学が意識中心のものであり、あるいは身体教育という形で身体に特化した片面性を持ったものであったことを批判し、意識と身体とをつなぐ美術制作から教育学を問い直そうとした点においても高いオリジナリティを持っている。美術教育が、単なる手と目と感性の教育なのではなく、人間が身体と感性を通じて世界と出会い直すという意味で、人間が生きていくことそのものにとって重要なものであることを見出している。今後美術教育研究者としてさらに研究を進めていくことを十分に期待させる論文である。審査会においては、以上のような点から見て課程博士論文として特に優れたものであることを審査員全員一致で高く評価し、合格と判定した。

(作品審査結果の要旨)

審査の対象となった作品は、乾漆で作られた等身大の子どもの像2体と木の枝を、高さの異なる3本の木製の柱の上部にそれぞれ取り付け、展示空間に視覚的な高さと広がりを持たせる様に配置構成された彫刻作品である。

作者は、様々な試作を繰り返す中から今回の審査展発表の展示構成を作り出した。三本の柱の上に立つ二人の子どもと一塊の木の枝が浮遊し、見る人を静寂のなか、作者の精神世界へ導くことに成功している。

作者は修士、博士の課程を通して、自身に内在する心象風景のイメージを塑造制作と乾漆技法で表現することに専念してきた。そして、一貫して時間のかかる地道な作業を積み重ねることに取り組み、博士課程における実技制作研究の成果として完成させている。

この作品は、木の柱と乾漆素材の持つ独特の材質感が温もりと柔らかさを感じさせ、自然感と人間観のあふれた空間を作り出すことに成功していると言える。しかし、木の材質の選択と着色された色合いと、乾漆部分の材質感をいかした形体の追求に未熟さが残ること、また、着色された色合いは成功しているものの、材質感が弱まっているところは、今後の課題であるといえる。

審査の過程において、この作品制作のプロセスを踏まえた上で、独自の世界観を有する作品として高く評価された。一見、作品上からはくみ取れない地道な手仕事の積み重ねに加え、こつこつと作者自身の身体の鼓動を重ね合わせるような制作姿勢の上に成り立った作品であるとして、作者自身の制作に向かう姿勢も高く評価できるとされた。

審査結果として、制作技法と表現方法を時間をかけて積み重ね、研究の成果として導き出したこと、また、この作品は博士課程での作者の真摯な制作姿勢の上に成り立つ、制作研究の成果が十分に見ることのできるものであり、完成度も高く、独自の表現を有した存在感のある作品となっているとして評価し合格とした。

(総合審査結果の要旨)

生井亮司君は、実技研究として修士課程、博士課程を通して乾漆彫刻の制作実技研究を一貫して続けてきた。また、理論研究として、美術制作における制作者自身の身体と作品との関係における人間形成の可能性についての研究に取り組んできた。

理論研究においては、修士課程では美術作品制作における作品と制作者の身体の間について研究し、修士論文『負の形象の力学』を執筆した。この度提出された博士学位審査提出論文『触覚の教育学－塑造制作における「身体的自己」の形成について－』では、美術作品制作における制作者の身体を基盤として制作者自身に身体的自己が形成されていくことについて研究した。そしてこの研究から導き出された結論は、従来の美術制作での概念に対して、自身が地道な研究を通してたどり着いた独自のものであり、本人のこれからの制作や研究を進めるにあたり、基盤となるものであると考えられる。こうした理論研究を通して、論文で言うところの、制作することを通して「身体的自己」が形成されていくプロセスが、創作研究における自身の制作姿勢をつくりだし、博士審査提出作品の基盤になっていると考えられる。

課題は残すものの、制作を基盤とする研究者が真剣に取り組んだ内容は、美術研究領域にとって貴重な研究であり、評価に値するものと考ええる。

博士審査展提出作品は、論文で言うところの、作者が作品に触れて制作することは、実は自らの身体に触れることであり、作者と作品のあいだには、触れることが同時に触れられるという主客の反転があり、制作行為とは、触覚を介した「内なる他者」たる作品と作者の意識との間を循環することであるというように、完成した作品から作者自身の制作過程での身体的鼓動と精神の葛藤を感じさせる。

このような制作に対する真摯な姿勢が創作研究の結果に導くことが出来た要因として評価できるところである。また、地道な制作の積み重ね無くしては表せない、静寂のなかに作者自身の自然への畏敬や人間への尊厳を感じさせる、精神性の高い作品として高く評価された。

本研究の内容は、美術表現を追求する制作者独自の探求の姿勢をもって達成することが出来たものであると言える。そして、その研究に対する謙虚な姿勢があつてこそその成果であると考えられる。

総合審査結果として、提出された論文と作品の関係も加え、一貫した研究の成果が大いに認められる。論文、作品共に質の高い優れた研究であると高く評価し総合的に合格とした。